

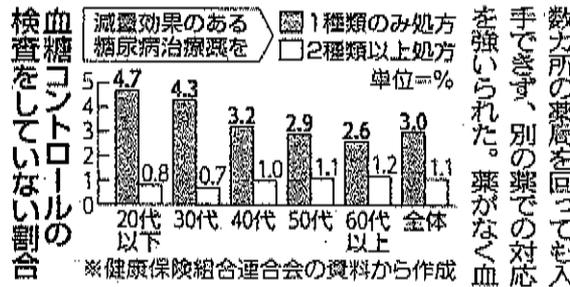
糖尿病治療薬 足りない

ダイエット目的処方多発

糖尿病治療薬をダイエット目的で処方する事例が多発している。金額自己負担の自由診療だけでなく、公的な保険診療での処方も疑われる事例もあることが、健康保険組合連合会（健保

連）の調査で判明。「メデイカルダイエット」などのインターネット広告の影響で薬は品薄となっており、本来の糖尿病患者に行き渡らない事態が起きている。

「今年夏前へから子供給が途絶えた。本当に困った」。東京都内の大病院の医師(38)は嘆く。10人前後の治療に支障が出ているといい、50代の女性患者は糖尿病治療で皮下注射するGLP-1受容体作動薬が



数カ所の薬局を回っても入手できず、別の薬での対応を強いられた。薬がなく血糖値が上がってしまった人もいる。健保連がレセプト（診療報酬明細書）調査したの

は、GLP-1とSGLT-2阻害薬という減糖効果があがる糖尿病治療薬。2020年10月から22年9月までの657万3千件の外来患者のレセプト（5万4067医療機関の患者5万4563人）のうち、延べ3カ月以上受診した75歳未満の患者への両薬の処方と、血糖コントロールの指標となる検査の有無を分析した。

分析結果によると、両薬のいずれか1種類だけを処方された人は、糖尿病治療薬2種類以上を処方された人に比べて検査をしていない割合が約3倍に上った。2種類以上処方されている人は、本来の糖尿病の治療である可能性が高い。例えば、30代の女性は皮膚科の診療所でGLP-1と合わせ、糖尿病治療薬とは別の抗肥満薬を処方された。40代の男性は美容皮膚科の診療所でSGLT-2と肥満治療の漢方薬、20代女性にはGLP-1とシミ取りや肌荒れの薬と保湿剤を出された。いずれも検査はしておらず、レセプト上の病名は糖尿病だった。健保連の担当者は「いずれも糖尿病治療でなくダイエットや美容目的の可能性が強い」と話す。

ネット上では「GLP-1ダイエット」などの広告が自立。オンライン診療による自由診療で薬が自宅などに届く手軽さもあり利用者が多いとみられる。製薬会社は新規患者への処方制限を医療機関に求めるなどしているが、在庫が少ない状態が続いている。レセプト分析のアドバイザーを務めた薬剤師で慶応大薬学部山浦克典教授は「ダイエット目的の処方には急性膵炎などの危険もある」と警告している。（五十住和樹）